

畠内遺跡出土の細形管玉の報告

折登 亮子*

はじめに

畠内遺跡は、八戸市南郷大字島守字畠内に所在する、縄文時代・弥生時代・古代・近世の複合遺跡である（図1）。八戸平原開拓建設事業（世増ダム建設）に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成4～13年にかけて8次に亘る発掘調査を行った。遺跡範囲のすべてを調査し、総面積は66,000m²に及ぶ。発掘調査では、縄文時代前期中葉～中期初頭の円筒下層式期の拠点的な集落、弥生時代前期・中期後半～後期の集落、江戸時代の墓域等が確認され、貴重な情報が得られた。調査成果は『畠内遺跡I～IX』として刊行済みである。

平成30年度から行われた当センターの改修工事の際に、本遺跡出土の管玉1点がタッパーに入った状態で見つかった。調査担当者に聞いたところ、報告書作成の際行方不明となり、未報告となっていた資料であることが判明した。碧玉製とみられる細形管玉であり、弥生時代に伴うものと考えられる。本県南部地域ではこれまでに細形管玉の出土事例がなく貴重な資料であり、資料の報告を行うこととした。

1 管玉の図化（図2、表1・2）

管玉の実測図作成、計測、写真撮影、圧痕レプリカ法による孔内断面の観察、X線写真撮影を行った（図2左）。デジタルノギスでの計測では、全長17.1mm、幅2.7mmを測る。重さは約0.2gで、折れ・欠けによる欠損はない。孔径は上面1.0mm、下面1.4mmで、圧痕レプリカ法・X線写真から両側穿孔である。孔内やレプリカ法のシリコンの観察では線条痕が確認でき、穿孔部の断面形は円錐状でなく筒形に近いことから、石針による穿孔が考えられる。色調は暗緑灰色（5G4/1）を呈し、肉眼観察からは碧玉製の可能性がある。遺物写真は顕微鏡による撮影を行い、グレーカードによる色調補正を行った。

管玉の形状・計測値や、碧玉製と考えられること、石針による穿孔の可能性が高いことから、弥生時代の細形管玉と考えられる。大賀克彦が提唱した分類では直径2～4mm、全長15mm以上の「領域L」の範囲に含まれる（大賀2001・2011、表1・2）。

2 管玉の出土状況（図2・3）

管玉はチャック袋に入っており、袋表面には「97畠内 BD-43 III層 97.7.2」と記載されている（図2）。1997年度（平成9年度）の調査成果は、『畠内遺跡V・VI・VIII』に掲載されている。『畠内遺跡V』「第II章第2節調査の経過」には、「6月上旬、グリッド付近に南北方向のトレンチを設定し粗掘りを開始した。その結果土石流層を挟み上層に弥生時代から縄文時代後期にかけての文化層が、下層に縄文時代前・中期の文化層が認められたため、上層の遺構確認に努めることになった。弥生時代の管玉や縄文時代後期と思われる配石遺構などが検出されたが遺構・遺物量ともそれほど多くはなかった。7月も引き続き捨場の遺物取り上げと周辺の遺構確認精査に努めた。」との記載がある（笹森1999）。この“弥生時代の管玉”が本遺物とみられる。出土状況のスライドが保管されており、「97 畠内 BD-43 遺物出

* 青森県埋蔵文化財調査センター

土状況 Ⅲ層上面(W→)」とリネームされている(図2右)。

管玉出土地点(BD-43グリッド)は、ちょうど平成9・11年度調査区と平成12年度調査区の境界付近である(図3)。また、平成7年度に確認され、その後平成9・11・12年度の4か年に亘り調査された、円筒下層式を主体とするE捨場の範囲中でもある。このため、周辺の調査成果のうち、管玉に伴う可能性がある弥生時代の遺構外出土遺物については『畠内遺跡VII』(平成9・11年度調査区報告)、『畠内遺跡VII第1分冊』(平成12年度調査区報告)、『畠内遺跡VII第2分冊』(E捨場報告)に分かれて掲載されている。

出土層位であるⅢ層は、『畠内遺跡V』に掲載された谷部分の基本層序3(AZ-45付近)の自然堆積層である第Ⅲ層に相当するとみられる(図3左下)。直下の第IV層が縄文時代後期から弥生・平安時代までの遺物包含層で、第Ⅲ・IV層の境界付近には炭灰色(10YR8/1)浮石が微量に含まれていると報告されているが、共に「平場の第Ⅱ層」に対応するとされている(茅野1999)。

3 管玉周辺の出土遺物(図4・5)

管玉の帰属時期を推測するため、周辺から出土した弥生土器を集成した(図4)。管玉が出土したBD-43グリッドの周辺15m内(BA～BF-38～44グリッド)からは、弥生時代中期～後期の遺物がまとまって出土している。また、やや離れるが北西側のAV～AY-37～43グリッド周辺15m前後の範囲からも、弥生時代中期～後期の遺物が出土している。『畠内遺跡VII第1分冊』・『畠内遺跡VII第2分冊』掲載分は出土層位の表記がないが、『畠内遺跡VII第2分冊』掲載分は観察表によるとすべて第IV層から出土している。こうした遺物の出土状況から、土石流を起源とする第V層の上部に、弥生時代中期～後期の小規模な包含層(第IV層)が形成されていることが読み取れる。

管玉は第Ⅲ層出土であり、包含層である第IV層の直上層から出土していることとなるが、出土位置・層位共に近接することから、管玉も本来はこの包含層(第IV層)に伴っていた可能性もある。

なお、BD-40から出土した蓋(図4-366、1度報告後に破片が接合したことから再報告されている)は、出土状況の写真が撮影されていたよう、「97 畠内 BD-40 蓋出土状況 (W→)」とリネームされたスライドが管玉のスライドと一緒に保管されていた(図5右上)。この蓋は、『畠内遺跡VII第2分冊』ではIV層出土として報告されている。調査担当者に当時の状況を聞いたところ、管玉と蓋は同じような状況で出土したと記憶しているとのことであった。

より近接して出土しているBB～BFラインの遺物を集成した(図5)。これらの資料は、『畠内遺跡VII第1・2分冊』では「田舎館Ⅲ群相当」、「天王山式～赤穴式相当」として報告されたほか(茅野・佐藤2002)、『畠内遺跡IX』では時期的な位置づけが考察され、中期中葉や中期末葉～後期前葉とされている(佐藤2003)。『青森県史』では「中期中葉の田舎館式に併行する土器や、中期後葉の大石平I式土器、後期の天王山式土器など」とまとめられている(木村2005)。

中期中葉として報告されたものでは、縦位～斜位の縄文地に多条の平行沈線や鋸歯状沈線が施される甕または壺の破片がある(図5-15・356)。前述した蓋は、RL地に隆帯+キザミが施される(図5-366・445)。隆帯が付される蓋は、田舎館式の一系統である「垂柳式」の中では新しく位置付けられている(大坂2010)。多条・鋸歯状の沈線といった甕・壺の特徴からも、田舎館式併行の土器群とみられる。

中期末葉～後期前葉として報告されたものでは、甕とみられる破片が主体を占める(図5-369～

371・373～375・446・454・455)。口唇部に地文の回転施文やキザミをもち、直下に沈線が施され、無文帶をもつものが多い。沈線は1条・多条どちらもみられる。平行沈線間に横方向の刺突が施されるものが数例ある(図5-369・446)。いわゆる交互刺突文が施されるものは、BB～BFラインでは出土していない。甕の特徴からは中期後葉の念佛間式(大石平I式)や後期初頭の家ノ前式併行とみられるが、交互刺突文の破片を伴わないことからは、中期後半に収まる可能性もある。筆者は土器を実見できていないため、これ以上の考察は避けたい。

このような周辺の土器の出土状況から、管玉の帰属時期は弥生時代中期中葉以降、長くとも後期前葉の間と推測される。なお、畠内遺跡では弥生時代前期と中期～後期の堅穴建物跡・遺物集中範囲がそれぞれ確認されているが、管玉出土地点とは離れている(図3)。管玉出土の包含層は、こうした居住域や捨て場とは別エリアに形成されている。また、続縄文系である後北C2・D式とみられる破片も出土しているが、これも管玉出土地点とは離れた位置から出土している。

4 管玉の形質からの位置づけ(図1、表1・2)

次に、細形管玉が出土した他の遺跡例と比較してみる。まず、畠内遺跡例と時期が近いと考えられる例を挙げる。外ヶ浜町宇鉄遺跡SK14からは356点の細形管玉が出土し(青森県立郷土館1979)、その時期は中期中葉とされている(根岸ほか2021)。石材分析では、田舎館村垂柳遺跡の例と共に佐渡猿八産と推測されている(藁科・福田1997)。七戸町舟場向川久保(2)遺跡SK13からは137点の細形管玉が出土した。筆者は、遺跡内出土土器の時期は中期前葉～中葉と幅があるものの、実見したところ管玉は宇鉄遺跡例に非常に類似しており、中期中葉の可能性が高いと報告した(青森県教育委員会2022)。石材分析では上越市吹上遺跡の産地推定の構成に類似する(上越市2006)。

前段階の例としては、むつ市二枚橋(1)遺跡がある(青森県教育委員会2017)。中期前葉(二枚橋式)の土坑墓SK85からは関連品を含めて16点の細形管玉が出土している。実見すると全長が短めのものが多く、上記2遺跡及び畠内遺跡例とは色調が異なり白みが強い。報告者の佐藤智生は、産地は石川県小松市八日市地方遺跡周辺やそれ以西と考察している(佐藤2017)。

上記の遺跡と畠内遺跡例を比較してみる。二枚橋(1)遺跡例とは色調や全長の値の差がやや大きく、宇鉄遺跡・舟場向川久保(2)遺跡例の方が類似することから、畠内遺跡例は出土土器から推測される時期と同様、中期中葉以降とみてよいと思われる。全長はやや大きいものの、直径や孔径等の作りには差が認められず、色調はよく類似しており、新潟県佐渡島周辺の碧玉製の可能性が挙げられる。

これらの細形管玉の法量をグラフにした(表1・2)。畠内遺跡例は全長17.1mm、幅2.7mmで、前述したように大賀克彦の大別では「領域L」の範囲となる(大賀2001・2011)^(註1)。東北北部には「領域L」はほとんどないことが指摘されており(根岸・大上・太田・岡本2021)、畠内遺跡例の全長の長さは特筆される。

同じように全長が長い管玉は、北海道や南東北では数例出土している(根岸・大上・太田・岡本2021、根岸・大上2021)。弥生III期併行の恵山式土器に伴う、余市町大川遺跡GP123、石狩市紅葉山33号遺跡GP26出土例のうち一部は「領域L」に含まれ、よく似た法量を示す(表2)。また、大川遺跡出土の全長が長い管玉は、多くが佐渡猿八産と指定されている(藁科・東村1995)。仙台市長町駅東遺跡SK214出土例のうち1点も「領域L」に含まれ(表2)、郡山市柏山遺跡にも同様の例がある。

おわりに

畠内遺跡の細形管玉は、弥生時代中期中葉～後期前葉の包含層から出土したことが明らかとなった。交互刺突文が施される土器を伴わないことから、中期に収まる可能性も考慮された。管玉の特徴からも中期中葉以降の資料と考えられる。一方、中期中葉の宇鉄遺跡例や舟場向川久保(2)遺跡例よりも全長が長い点は特筆される。色調や類例との比較からは、新潟県佐渡島周辺の碧玉製の可能性が指摘できる。今後石材分析、産地分析の機会を待ちたい。

青森県域では、ここ10年内に上述の二枚橋(1)遺跡、舟場向川久保(2)遺跡例が報告された。また、時期は異なるが七戸町猪ノ鼻(1)遺跡でも菅玉を含む玉類が出土し、太平洋側での出土事例が増加している(図1)。前期：八戸市是川中居遺跡→中期前葉：むつ市二枚橋(1)遺跡・瀬野遺跡、二戸市火行塚遺跡→中期中葉：七戸町舟場向川久保(2)遺跡、中期中葉～後期前葉：八戸市畠内遺跡→後期後半：九戸村長興寺I遺跡・続縄文期：七戸町猪ノ鼻(1)遺跡、八戸市市子林遺跡と、各時期において一定量の管玉の出土がみられる^(註2)。

これまで管玉の搬入ルートとしては、北陸から日本海側を通ることが主に想定されてきた(石川2004、大上2021等)、太平洋側でも途切れることなく管玉が搬入されていることからは、山越えなど陸路での搬入が想定される。また、畠内遺跡の管玉の規格は北海道・東北地方南部例に類似し、関連性をもつ可能性もあるかもしれない。今後検討していきたい。

謝辞

宇鉄遺跡の資料調査では、青森県立郷土館の神康夫氏(当時)、杉野森淳子氏、調査写真のスライドの収集等については青森県埋蔵文化財調査センター茅野嘉雄氏、資料の写真撮影に際しては青森県埋蔵文化財調査センター長谷川大旗氏にお世話になりました。また以下の方々からご教示をいただきました。記して感謝します。 三浦一樹 大上立朗 上條信彦

注釈

註1 大賀克彦は、「すべての石材に見られるおよそ直径2～4mm、全長5～12mmの範囲を領域Sとし、直径がほぼ同じながら全長が明らかに長い領域Lと、直径が4mmを超える領域Fを分離する」とし、碧玉製管玉の法量は領域S・L・Fにまたがると指摘した(大賀2001)。その後、領域Se・領域Sw(直径2～4mm、全長15mm以下)、領域F(直径4mm以上、全長10mm以上)、領域L(直径2～4mm、全長15mm以上)に大別している(大賀2011)。

註2 七戸町森ヶ沢遺跡の赤色の細形管玉1点については、調査区内から弥生～続縄文の北大式期と幅広い時期の遺物が出土しており、伴う時期が判断できなかった(青森県史編さん考古部会2005、阿部2008)。

引用・参考文献

- 青森県史編さん考古部会2005『青森県史資料編考古3弥生～古代』
- 石川日出志2004「弥生後期天王山式土器成立期における地域間関係」『駿台史学』第120号
- 大賀克彦2001「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』第86卷第4号
- 大賀克彦2011「弥生時代における玉類の生産と流通」『講座日本の考古学5弥生時代(上)』
- 大上立朗2019「弥生中期後半における北陸玉作集団と東北系集団」『秋田考古学』第63号
- 大上立朗2021「弥生時代併行期の北日本における碧玉・鉄石英製管玉の流通」『秋田県埋蔵文化財センター紀要』
- 大坂拓2010「田舎館式土器の再検討」『考古学集刊』第6号
- 木村高2005「第I部第3章49畠内遺跡」『青森県史資料編考古3弥生～古代』
- 工藤竹久2005「第2節青森県の弥生土器」『青森県史資料編考古3弥生～古代』

- 斎野裕彦2011「十東北地域」『講座日本の考古学5弥生時代(上)』
- 笹森一朗1999「第II章第2節調査の経過」『畠内遺跡V』
- 佐藤智生2002「第4章縄文時代の遺物捨て場と出土遺物b類弥生時代中・後期・後北C2-D式土器」『畠内遺跡VIII』第1分冊
- 佐藤智生2003「第7章まとめと考察第2節弥生時代中・後期」『畠内遺跡IX』
- 佐藤智生2017「第6章総括第3節弥生時代」『二枚橋(1)遺跡』
- 佐藤祐輔2015「7東北」『考古調査ハンドブック12弥生土器』
- 茅野嘉雄1999「第III章第2節基本土層」『畠内遺跡V』
- 茅野嘉雄2002「第9章遺構外出土土器」『畠内遺跡VIII』第2分冊
- 根岸洋2020『東北地方北部における縄文／弥生移行期論』
- 根岸洋・大上立朗・太田圭・岡本洋2021「宇鉄遺跡出土の碧玉製管玉に関する基礎的研究」『青森県立郷土館紀要』第45号
- 根岸洋・大上立朗2021「東北地方における弥生前期・中期の碧玉製管玉」『糸』第10号記念号
- 藁科哲男・東村武信1995「大川遺跡出土の管玉の産地分析」『1994年度大川遺跡発掘調査概報-余市川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要VI-』
- 藁科哲男・福田友之1997「青森県宇鉄・砂沢・垂柳遺跡出土の碧玉製管玉・玉材の産地分析」『青森県立郷土館調査研究年報』第21号
- (畠内遺跡の報告書)
- 青森県教育委員会1994『畠内遺跡I』青森県埋蔵文化財調査報告書第161集
- 青森県教育委員会1995『畠内遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書第178集
- 青森県教育委員会1996『畠内遺跡III』青森県埋蔵文化財調査報告書第187集
- 青森県教育委員会1997『畠内遺跡IV』青森県埋蔵文化財調査報告書第211集
- 青森県教育委員会1999『畠内遺跡V』青森県埋蔵文化財調査報告書第262集
- 青森県教育委員会2000『畠内遺跡VI』青森県埋蔵文化財調査報告書第276集
- 青森県教育委員会2001『畠内遺跡VII』青森県埋蔵文化財調査報告書第208集
- 青森県教育委員会2002『畠内遺跡VIII』青森県埋蔵文化財調査報告書第326集
- 青森県教育委員会2003『畠内遺跡IX』青森県埋蔵文化財調査報告書第345集
- (報告書)
- 青森県教育委員会1985『大石平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告第90集
- 青森県教育委員会1994『家ノ前遺跡II・鷹架遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告第160集
- 青森県教育委員会2017『二枚橋(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第581集
- 青森県教育委員会2021『猪ノ鼻(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第616集
- 青森県立郷土館1979『宇鉄II遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告第6集・考古-3
- 青森県立郷土館1989『三厩村宇鉄遺跡発掘調査報告書(II)-弥生甕棺墓の第4次調査-』青森県立郷土館調査報告第25集・考古-8
- 阿部義平2008『北部日本における文化交流—統縄文期／寒川遺跡・木戸脇裏遺跡・森ヶ沢遺跡発掘調査報告(下)』
国立歴史民俗博物館研究報告第144集
- 石狩町教育委員会1984『紅葉山33号遺跡発掘調査報告書』
- 伊藤信雄・須藤隆1982『瀬野遺跡』東北考古学会
- 田舎館村教育委員会1982『垂柳遺跡(昭和56年度遺跡確認調査報告書)』
- 田舎館村教育委員会1989『垂柳遺跡—垂柳遺跡範囲確認調査—』
- 田舎館村教育委員会2009『史跡垂柳遺跡発掘調査報告書(13)』田舎館村埋蔵文化財調査報告書第16集
- 郡山市教育委員会1972『郡山市柏山遺跡発掘調査報告書』
- 小泊村教育委員会2003『坊主沢遺跡発掘調査報告書』小泊村文化財調査報告第3集
- 財岩手県埋蔵文化財センター1981『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第23集
- 財岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2002『長興寺1遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第388集
- 上越市教育委員会2006『吹上遺跡』
- 仙台市教育委員会2007『長町駅東遺跡第4次調査』織細市文化財調査報告書第315集
- 八戸遺跡調査会2004『是川中居遺跡中居地区G・L・M』八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告第5集
- 八戸市教育委員会2004『八戸市内遺跡発掘調査報告書18』八戸市埋蔵文化財調査報告書第102集
- 福島県教育委員会1966『新産業都市指定地区遺跡発掘調査報告書』
- 余市町教育委員会2000『大川遺跡における考古学的調査II(墓壙篇1)』

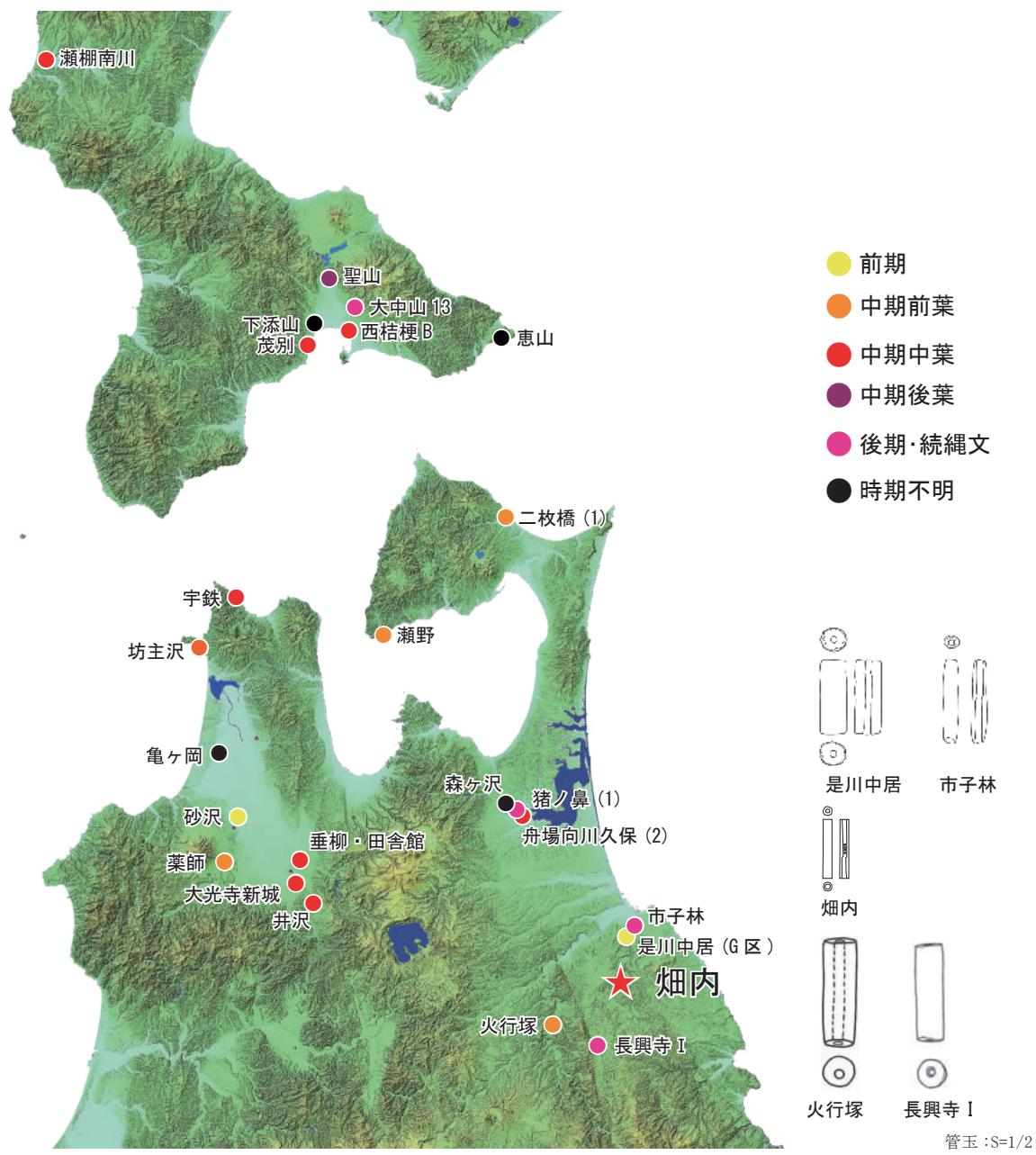
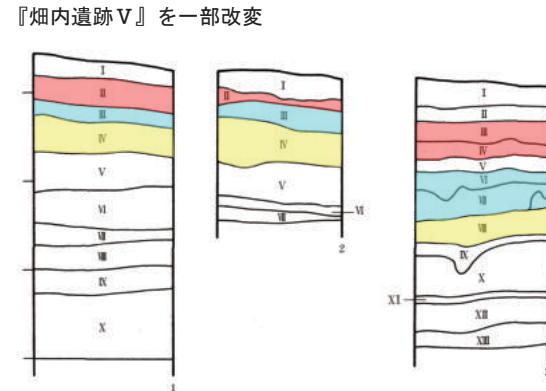
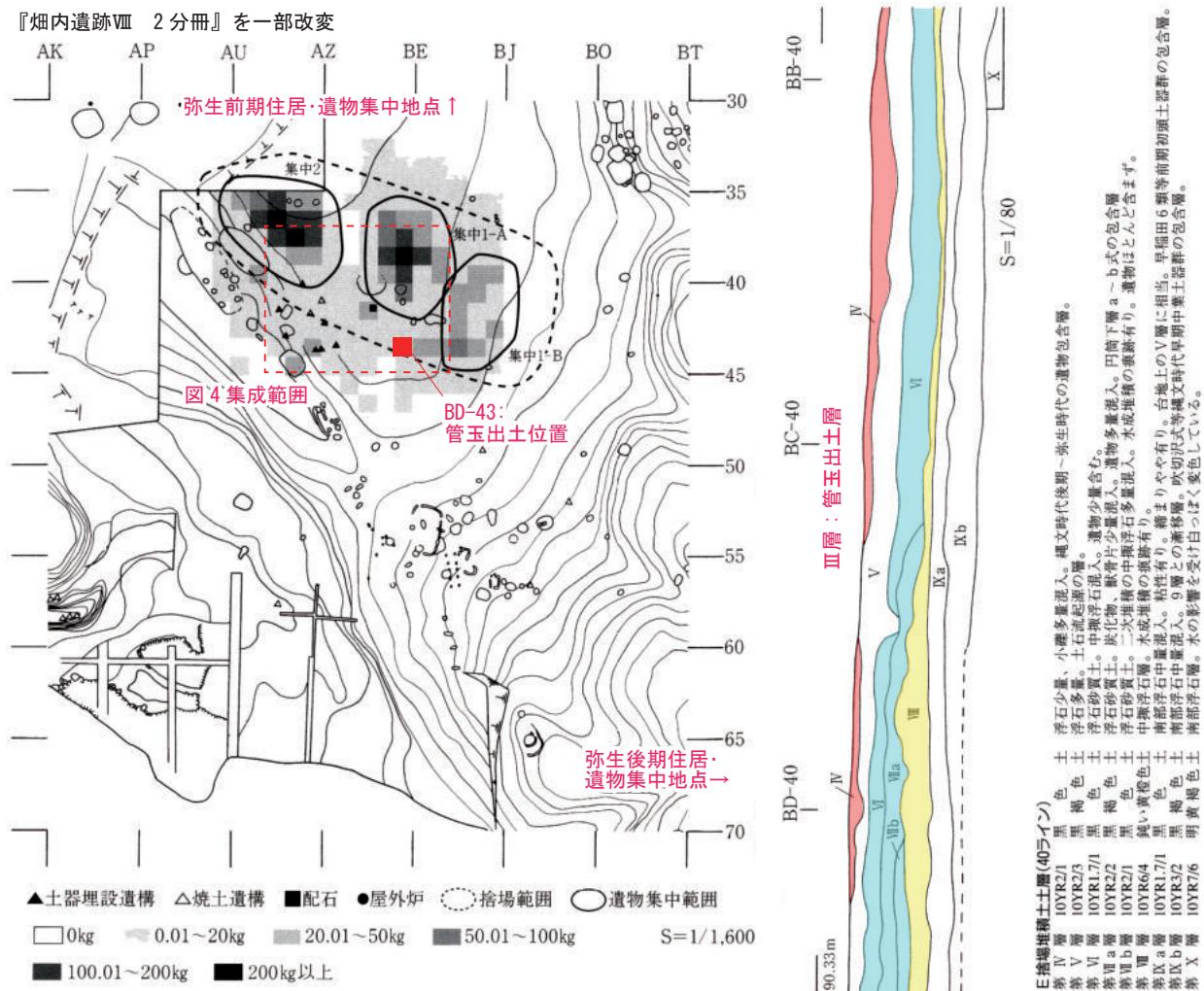


図1 遺跡位置図・周辺出土の管玉



図2 畠内遺跡管玉実測図・写真



1:『畠内遺跡Ⅰ』 2:『畠内遺跡Ⅴ』
調査地点基本層序 BZ35 付近基本層序

第Ⅲ層：
平場第Ⅱ層に対応
第Ⅳ層：
繩文後期から
弥生・平安包含層
平場第Ⅱ層に対応
第Ⅴ層：
水成堆積層
第Ⅵ・Ⅶ層：
円筒下層式包含層
平場第Ⅲ層に対応
第Ⅷ層：
中搬运石層
平場第Ⅳ層に対応



97 畑内 BE ラインセク (BE-39) 西壁 (E→)

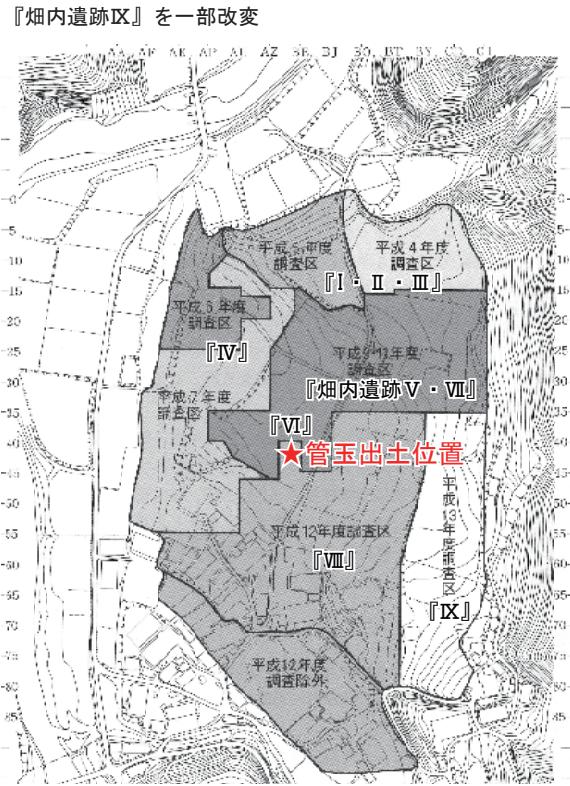
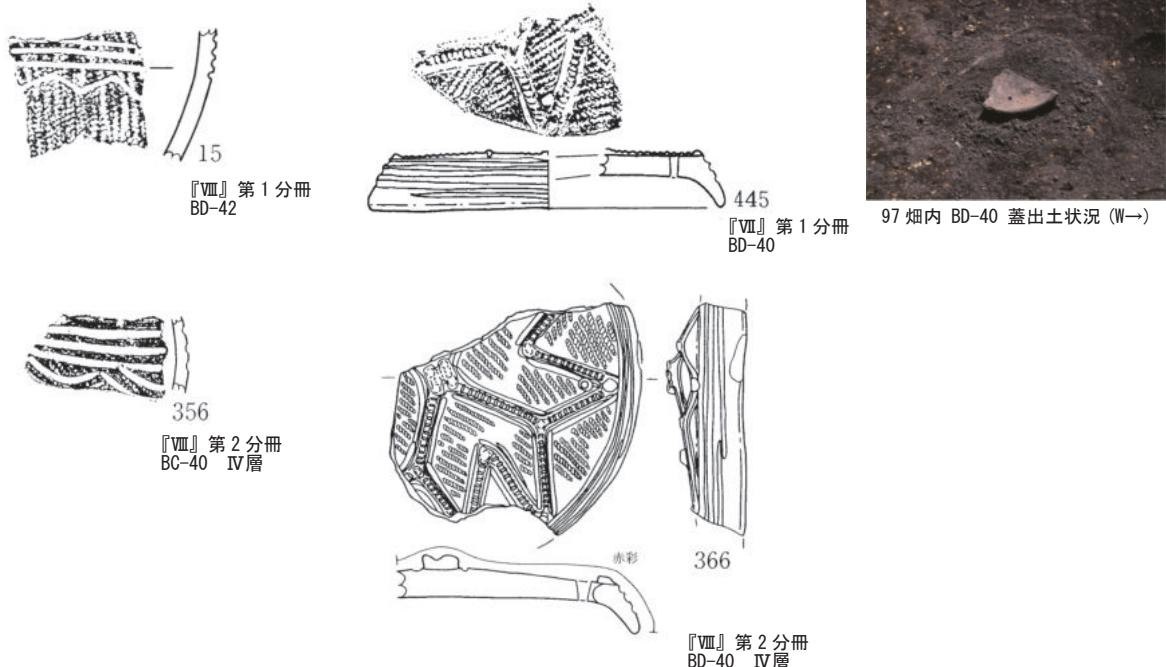


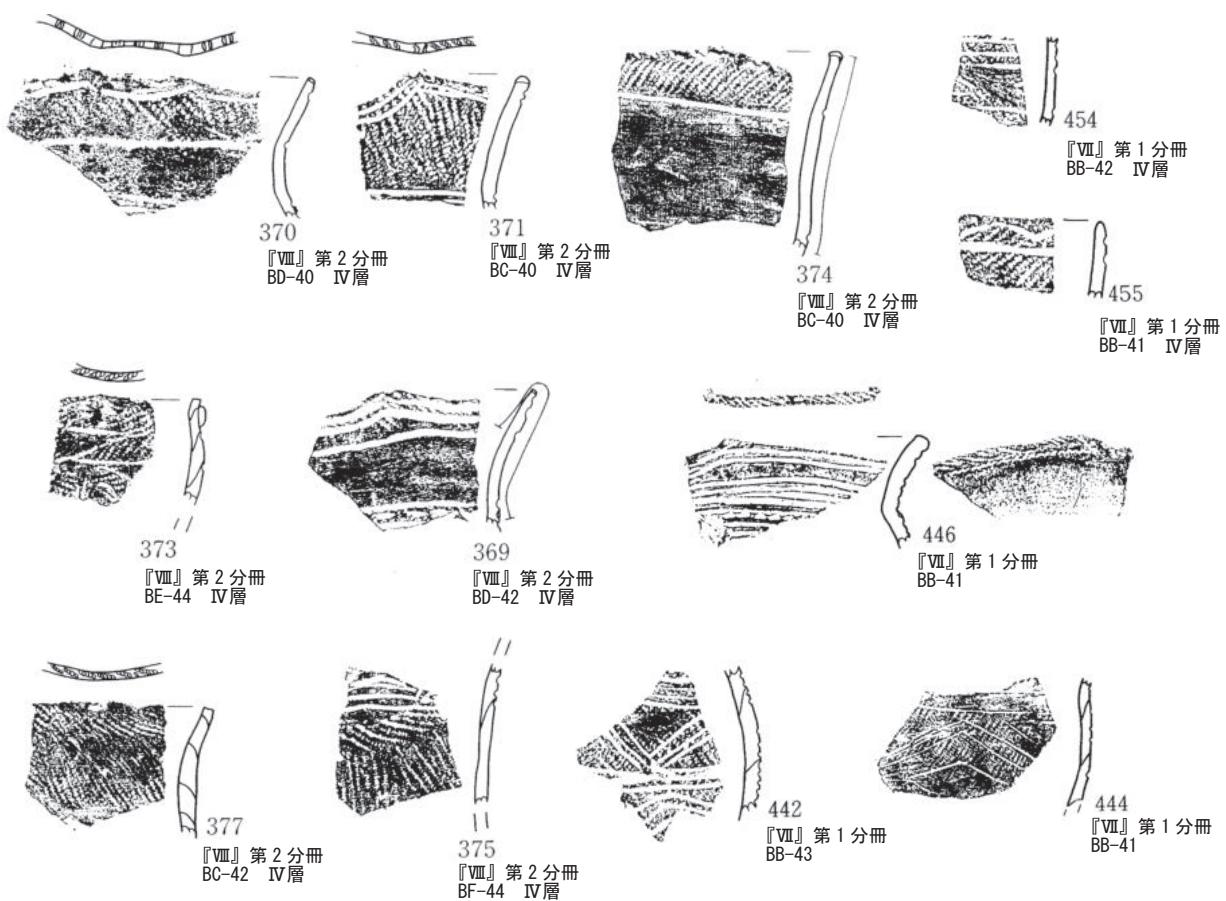
図3 管玉出土位置図

AW	AX	AY	AZ	BA	BB	BC	BD	BE	BF
37									
38			353		357		358		440
39					376		355		
40					360		362		364
					363				367
41					354				
42							454		444
43					372		17		442
44	※英字は東西、数字は南北のグリッドを示す 『烟内遺跡VII』第1分冊:440~442・444~446・454~455 『烟内遺跡VIII』第1分冊:15~17 『烟内遺跡VIII』第2分冊:353~364・366~377 すべてIV層出土								
	管玉 出土地点								
	17								
	442								
	373								
	375								

中期中葉



中期後葉～後期前葉



0 S=1/3 10cm

図5 管玉周辺出土土器（周辺グリッド）

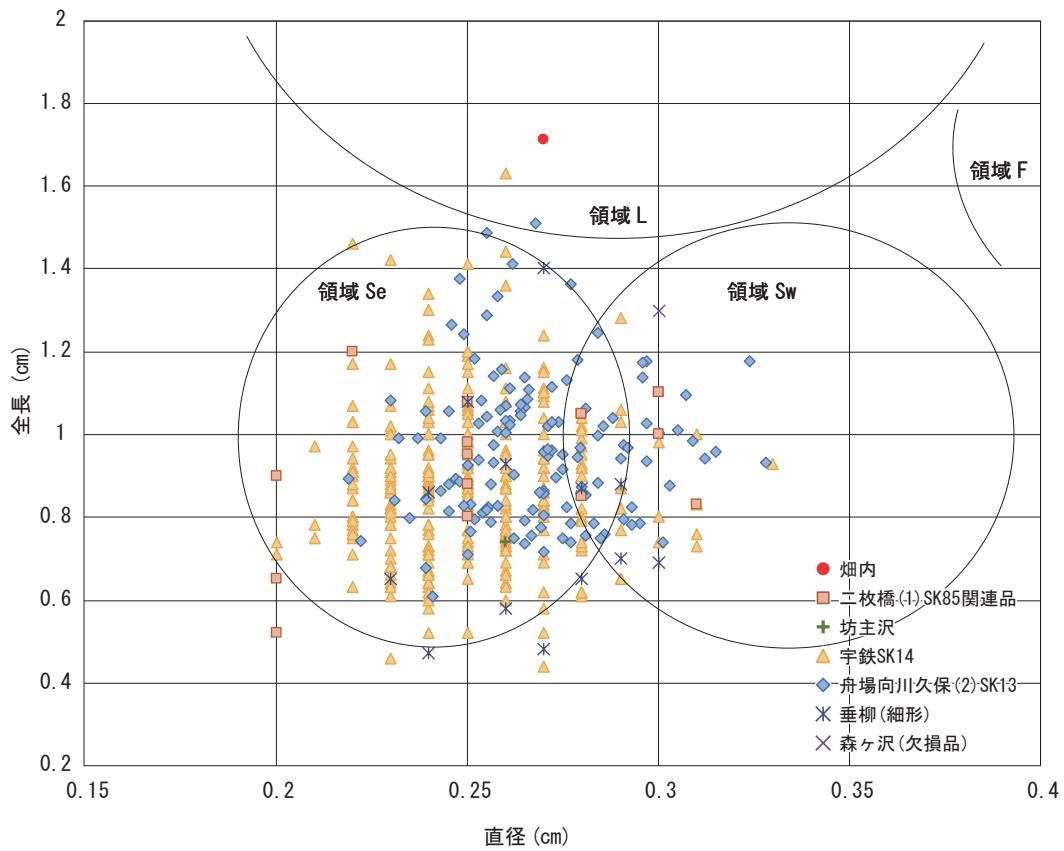


表1 青森県内の細形管玉

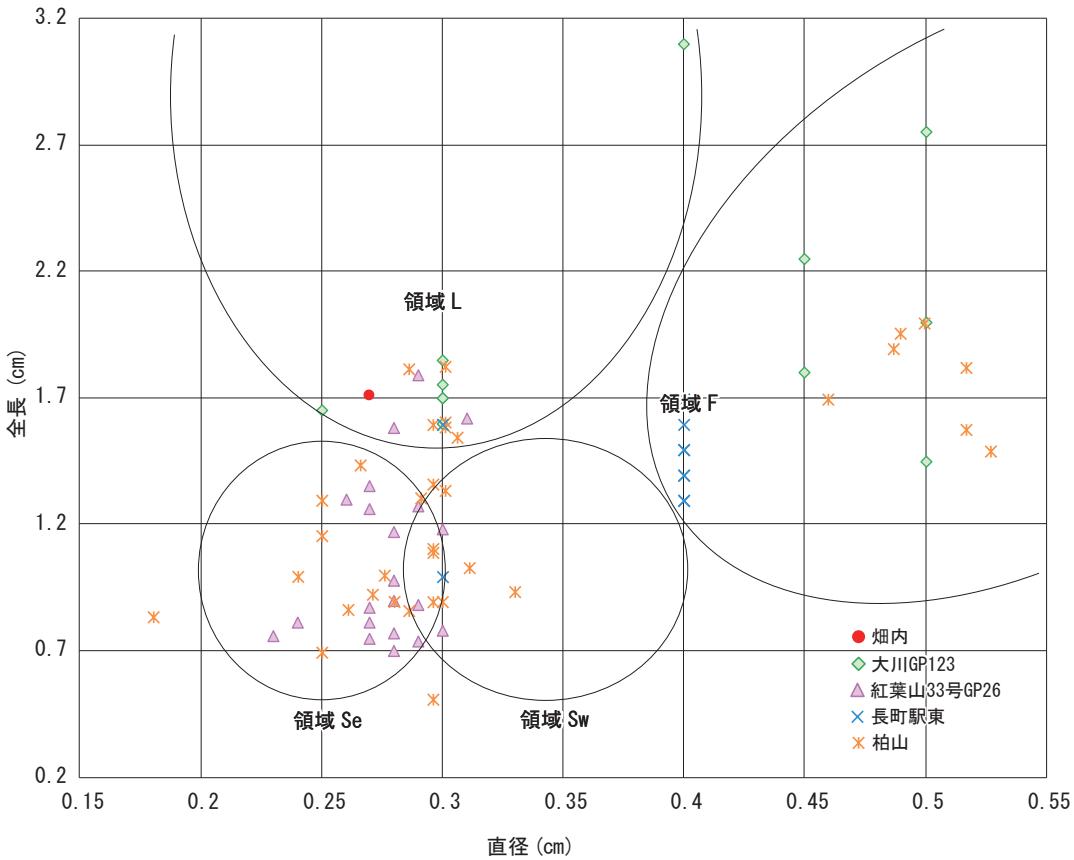


表2 煙内遺跡例と類似する細形管玉

二枚橋(1):青森県教育委員会 2017

宇鉄:根岸・大上・太田・岡本 2021

垂柳:田舎館村教育委員会 1982・1989

大川:余市町教育委員会 2000

長町駅東:仙台市教育委員会 2007

坊主沢:小泊村教育委員会 2003

舟場向川久保(2):青森県教育委員会 2022

森ヶ沢:阿部 2008

紅葉山33号:石狩町教育委員会 1984

柏山:福島県教育委員会 1966・郡山市教育委員会 1972

領域 Se・Sw・L・F の範囲は、大賀 2001・2011、

根岸・大上・太田・岡本 2021 や根岸・大上 2021 を

参考に作図

より計測